

学術フロンティア講義 「30年後の世界へーポスト2050を希望に変える」

いま「東洋」と「近代」を考えて、未来に何をのぞめるだろう？

1. はじめに自己紹介

- ・「いまどきオリエンタリズム？」
- ・「宗教・東洋（インド）・死」の3テーマと「オリエンタリズム」 … 「分断」を考える意味

2. 「オリエンタリズム」とは

●「ヨーロッパのオリエンタリズムに対する思考と支配の様式」

- ・辞書類によると…①東洋趣味 ②東洋学 ③画派の一つ と、
④E. サイドのいわゆる「オリエンタリズム」…「ヨーロッパのオリエンタリズムに対する思考と支配の様式」？

「……オリエンタリズムとは「東洋」と（しばしば）「西洋」とされるものとのあいだに設けられた存在論的・認識論的区別にもとづく思考様式なのである。」（上巻、p. 20） 「簡単に言えば、オリエンタリズムとは、オリエンタを支配したり、統治するための西洋の様式なのである。」（p. 21）

*平凡社世界大百科事典（第二版）の説明

彼によれば、歴史的にヨーロッパ（西洋）は、オリエンタ（東洋）を自己とは正反対の他者として措定し、世界をヨーロッパ対オリエンタという厳格な二項対立によって徹底的に割り切ることで、初めて自己のアイデンティティを獲得しつづけてきた。その過程でオリエンタには、ヨーロッパとは対比的に、後進性、不変性、受動性、停滞性、官能性、奇矯性、曖昧性、敵対性、被浸透性、非合理性といったさまざまな負の表象が画一的・総括的に割り当てられ、しかもそれが政治的権力と学術的権威とによって繰り返し強制されて〈オリエンタのオリエンタ化〉が進められた。その結果、嘆かわしいオリエンタを進歩したヨーロッパが救済するという図式が生まれ、それが近代の植民地主義や人権差別主義・自民族中心主義を正当化する根拠となった。

●サイドいうところの「オリエンタリズム」の特性

- ・否定的なステロタイプからなる本質論に基づく自他認識
[自] 西洋…近代・進歩・科学・理性・男性…
[他者（異物）] 東洋…古代・不変・宗教・神秘・女性…
- ・本質論+権力と権威による強制、実体化
「… [オリエンタに関する] 経験はすべて、オリエンタ的性格とかオリエンタ的専制、オリエンタ的官能といった、オリエンタの本質的特徴へと収斂していくのであった」（下巻、pp. 16-17）
→ 「支配・差異化・劣等視」 + 本質論的な語りの権力構造 の問題
… 重要な指摘として大きな反応 → それでどうなった？

3. 「オリエンタリズム批判」からどうなった？——「近代的宗教概念」批判から考えてみる

●そもそも…オリエンタリズム問題の多層性

- ・近代史における特に植民地構造内の問題 … 権力を伴う自／他関係問題 … 自／他間の普遍的問題

●「東西」の変化

- ・「オリエンタ」とはどこ？ … ビザンティン → イスラーム世界 → アジアその他
- ・冷戦終結、アジアの経済成長、米中の緊張、ウクライナ侵攻、インド太平洋の焦点化…
→ 今「オリエンタリズム」を考える意義は…ある？ない？

●「西洋中心主義」批判を経て

- ・すでに克服？

●さて宗教学では：「宗教」というけれど…

- ・今の「宗教」の用法： 明治期に religion の公式の訳語として採用。
(そもそもの日本語「宗教」は： 漢訳仏典にあった語で、「宗の教え」を意味し、仏教の下位概念だったとの説が有力)
- ・Religion の語源はラテン語の religio
- ・Religion の語が最初に翻訳されたのは日米修好通商条約（1858年）においてで、訳語には「宗旨」や「宗法」の語があてられた。
- ・その後 1869 年にドイツ北部連邦との間に交わされた修好通商条約第 4 条に記されていた Religionsübung の訳語に選ばれて定着。
- ・つまり、西洋から持ち込んで、古い語を訳語に据えたもの
- ・果たしてほんとうに religio=日本の宗教、なのか？
- ・「宗教」をはじめ、信仰、儀礼、呪術、世俗、霊性…等々、「宗教」を語る上で用いられている概念も、宗教学の枠組みも、みな西洋近代の構築物なのでは？それを普遍的なもののように使っているのでは？
→ 「近代的宗教概念批判」

●宗教学界における近代的宗教概念批判の流れ——分断批判の先の模索

- ・基盤研究(B)「近代的「宗教」概念と宗教学の形成と展開—日本を中心とした比較研究—」(代表・金井新二) 1998-2000 年度 → 島藺進、鶴岡賀雄編『宗教再考』ペリカン社、2004 年。
- ・基盤研究(B)「宗教概念ならびに宗教研究の普遍性と地域性の相関・相克に関する総合的研究」(代表・池澤優) 2010-2012 年度 → IAHR2010 トロント (Appropriation of the Western Concept of “Religion” in Asian Cultural Traditions: Panel I & II)
- ・基盤研究(B)「ポスト・セキュラー状況における宗教研究」(代表者・鶴岡賀雄) 2014-2017 年度 → IAHR2015 エアフルト

*IAHR 2010 (トロント) のパネル要旨より

Appropriation of the Western Concept of “Religion” in Asian Cultural Traditions (I, II)

By now, it has become well acknowledged that **the concept of “religion”, an intellectual product of the modern West**, is of only limited use in understanding cultural phenomena in the non-Western world, as it employs a strict Western separation of “religion” and “secular”. ……the presenters offer discussions of Asian countries ……to examine **how the appropriation of the Western-derived concept of religion and the Western field of religious studies has transformed local cultural traditions, and how the concept of religion has been affected in return.**

つの・複数の「 」と「 」?

2018 77
「宗教」 の現状と課題」

の二つの方向
A. 近代「宗教」概念の 西洋的文脈 宗教の意味の変遷
B. 翻訳された「Religion」概念の

多様な「宗教」定義 た多様 るのが
定義の数 ことにな いか
統一的な「宗教」定義 て「 」が
つので

→ 私の場合 AとBが分 部分を つと見
の可能性を

近代西洋の産物 る「近代的 」が
されたという

ただし、 変容して たとい

ルトのパネル (Perspectives on Religious Studies in India)での

のイ ドの の語用
ムの利用(る「肯定的オ ム)に
ので (人側の独自性、主体性あ もので こと
(→詳しく 後述)

、「近代的 」が ずしも
押し付 けけのものでは の主体
性 ことを示した

東西の分断の問題の認識 次の段階を模索

VS

支配的な らの文化
の中の(アポロ的なものと対 もものとしての)「デ ス的」なも
の—— り「詩的」で「神秘的」で 的で 的で女性的
あるとされる たとい れらの特
性はまさに、「東洋」をめ ジの領域で「発見」されて

一連の文化のプロ
をとら 。しかしこの物語 西洋の知的
理想として**世俗的な合理性が** こと、
って「**神秘**」な **もの**が されたこと、そしてこの「**神秘**」という
特性が **され** **的理解の対象とな**
投影されたことが いるので

この「分断」「オ ム」は

<分断の指摘>のジ

「オ 問題」研究のジ
、とい 二元論的枠組
みを批判的に分析 ことに むしろ し固定しか

東洋のエ 否定し奪
にしようとする、「東洋」の受動性という まさに
ム的表象 強化し、 らの言説 逆説的に
きしてしまい 結果として「東洋」のエ てしま
うという cf. は「語 ことがで か」 by

→ 「オ ム」
「物言 主体」 vs 「物言 東洋」
の構図 らして多様化した

*そこで、この分断の指摘のぐるぐる状態から抜け出すべく、
「宗教」「世俗」「霊性」等々のいわゆる「近代的宗教概念」、そして「近代性」について…

- ① 「西洋製」批判 ①-a オリエンタリズム批判
①-b 肯定的オリエンタリズム評価

↓

- ② 「複数性・多元性」重視

↓

- ③ 「共作・重複」性重視 …特に語彙の利用の仕方に着目して、共通語彙を探りたい

4. 「多元的近代」の可能性と難しさ

●多元的近代 (Multiple Modernities)

*濱西榮司「後期トウレーヌの脱近代化論——モダニティをめぐる諸理論と現代アジア」、田中紀行・吉田純編『モダニティの変容と公共圏』、京都大学学術出版会、2004年、pp. 195-196より。

「モダニティ特有の文化的方向性は、諸制度に埋め込まれているが、制度に還元されるわけではない」として、文化論的な時限でモダニティを捉え直し——「文明論的展開」——、主に90年代以降に「リバイバル」してきたのが、S. N. アイゼンシュタットやJ. アーナソンによる「多元的近代」(multiple modernities) 論である。その「根本的な姿勢」は、「一つの中心的な近代化のパターン、一つの中心的なモダニティのパターンがある」という幅広く受け入れられてきた想定との断絶」にあり、西欧近代を、「数多くの (many) モダニティの中のひとつ (One) として、つまり普遍的なものではなく特殊なモデルとしてとらえる...」に特徴がある。多元的近代論によれば、他の「文明」が西欧的モダニティを有し、近代化の同じルートを辿ることを前提視する必要はなく、西欧近代を尺度として各文明を位置付ける必要性もない。それぞれの文明がどのようなモダニティを有し、相互に影響を与えつつ、いかなる固有の近代化のルートを辿ってきたのかを記述・解釈していくのが多元的近代論であり、それは「多様な文明的遺産によって共一決定されるモダニティの形態の多元性を主張する」点で「過去十年以上にわたって社会理論における最も生産的な展開の一つ」と評価されている。

●「 違い...か」

- ・「文化相対主義の陥穽」：「違い」を認識することが「違い」に安住することになる？
 - ・多元主義の二面性：「違うけれどわかりあえる」？ 「違うからまあいいや」？
 - 多元主義のメタファーの変化： るつぼ／サラダ・ボウル／モザイク／ゲットー...
 - 多元主義の根本的な悩み： 同化・包摂と異化・疎外の矛盾
- 「同じ」か「違う」かの並行線を越えるには？ → そもそも「重なって」いるという視点へ

5. 「東洋」と「近代」の見直しへ——「インドのスピリチュアリティ」説の見直しの試み

チ	ティ
アポロ的	_____ 的
科学的	詩的
世俗的	宗教的
理性	神秘的
合理的	_____ 的
文明的	_____ 的
男性的	女性的
	東洋(インド)

しかし...
「神秘」「スピリチュアリティ」
_____ 的
_____ 的
_____ 的

「理性」と「神秘」は _____ ほとんど _____ の語彙

チ の「インドのスピリチュアリティ」

興味深いことに、ロマン主義的インド観の特徴である「神秘」と「精神性(スピリチュアリティ)」の強調は、現代の西洋のインド観に広まっているのみならず、描写の対象であるところのインド人自身の自己認識にも大きな影響をもたらしている。.....このような現象の好例が、ヴィヴェーカーナンダやモーハンダース・K. ガンディーといった人物であろう。ヴィヴェーカーナンダ (1863-1902) は、現代的な形でアドヴァイタ・ラーダーンタ (不二元論) を広めることを目指す団体、ラマクリシュナ・ミッションの創設者である。彼はインド文化の精神性(スピリチュアリティ)を強調し、これが近代西洋文明のニヒリズムや物質主義に対する処方箋となるとした (R. King *Orientalism and Religion* 1999, pp. 92-3.)


ヴィヴェーダ(ビド)

Swāmī Vivekānanda (1863-1902)

ムとアド

代表

1881
1887
1893 ゴの _____ (the World's Parliament of Religions in Chicago)に参加、スピーチで大
1897



リチャ ヴィヴェーダの説明

彼はインド文化の精神性 (スピリチュアリティ) を強調し、これが近代西洋文明のニヒリズムや物質主義に対する処方箋となるとした。オリエンタリストの「超越的」で「神秘的」というインド認識は、ヴィヴェーカーナンダを通すと、インドから人類への特別な贈り物ということになったのである。こうしてヴィヴェーカーナンダは、インドを疎外し、従属させ、支配するのに成功したまさにその言説を、インドの人々を普遍主義的で包括的なヒンドゥーイズムを旗印に結束させるための宗教的なファンファーレとして用いたのである。 (R. King *Orientalism and Religion*, 1999, pp. 92-3.)

西洋の口 主義的才 ムと
その肯定的利用

https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Swami_Vivekananda-1893-09-signed.jpg

- ・つまりヴィヴェーカーナンダの思想は、いわゆる典型的な「肯定的オリエンタリズム」例？
ヴィヴェーカーナンダは既存のオリエンタリズム的イメージを引き受けた上でその価値付けを反転させただけなのか？だとすれば、西洋側からのイメージ付けの語りへの逆転的応答ということか？



【仮説】 そうではなく、ヴィヴェーカーナンダ自身が近代的「スピリチュアリティ」概念の形成・展開に積極的で重要な役割を果たしたのではないか？

【検証】 実際に彼がどのように「スピリチュアリティ」という語彙を用いているか、「数えて」確認

	Vol.	Chapter Title	Text Title	Number of the term	Frequency of the term (per 1000 words)	Year	Note
1	3	Lectures from Colombo to Almora	Reply to the Address of Welcome at Ramnad	14	3.6	1897	
2	3	Lectures from Colombo to Almora	Reply to the Address of Welcome at Paramakudi	9	3.6	1897*	
3	9	Newspaper Reports	Part III: Indian Newspaper Reports	4	3.5	1893	Madura Mail, January 28, 1893
4	3	Lectures from Colombo to Almora	Bhakti	7	2.5	1897	Delivered at Lahore on the 9th November, 1897
5	3	Lectures from Colombo to Almora	Reply to the Address of Welcome at Madura	6	2.5	1897*	
6	3	Lectures from Colombo to Almora	The Influence of Indian Spiritual Thought in England	5	2.4	1898	
7	9	Lectures and Discourses	Bhakti-Yoga	10	2.2	1896	A bhakti-yoga class delivered in New York, Monday morning, January 20, 1896, and recorded by Mr. Josiah J. Goodwin
8	4	Lectures and Discourses	My Master	20	1.6	1896	Two lectures delivered in New York and England in 1896 were combined subsequently under the present heading.
9	1	Lectures and Discourses	Vedanta and Privilege	7	1.5	1896*	
10	3	Lectures from Colombo to Almora	The Work before us	7	1.2	1897*	Delivered at the Triplicane Literary Society, Madras
11	6	Lectures and Discourses	The Methods and Purpose of Religion	6	1.2	1896*	
12	3	Bhakti-Yoga	The Need of Guru	3	3.2	1896*	
13	7	Conversations and Dialogues (I-XXIX From the Diary of a Disciple)	XXVI	3	2.9	1902	Translated from Bengali
14	3	Bhakti-Yoga	Incarnate teachers and incarnation	3	2.8	1896*	17

・ イェーカーナンダは“Spirituality”の語を1896年と97年（＝最初の西洋訪問の最終年から、西洋での活躍を経て帰国し1年にわたってインド各地を訪ねた年）にもっとも多く使用している。

・ シカゴの万国宗教会議に出席し、普遍宗教論を展開した1893年にはほとんど用例がない（*3番の用は彼の言葉ではなく新聞記事）

・ 万国宗教会議での彼のスピーチのうち、記録のある6文書における用例はわずかに1例。

- ・なぜこの時期なのか？西洋の用例の影響？結局オリエンタリズムの反転、肯定的利用なのか？
- ・それならば、すでに西洋にこの用例が確立しているは

→ ・ほんとうにそうか、また数えて考えてみると…

【いかにもスピリチュアリティを使いそうな当時の西洋のテキストを確認】

- 万国宗教会議の記録 (J. H. Barrows (ed), 1893, *The World's Parliament of Religions*, Toronto: Hunter, Rose & Co.) 2 the Complete Works of Ralph Waldo Emerson ... 形容詞 “spiritual” はあるが名詞 “spirituality” はなし Helena P. Bravatsky, Henry Steel Olcott ... ヴィヴェーカーナンダに比べるとはるかに少ない
→ 実はそれほど多くの用例があったわけではないのではないか？
名詞「スピリチュアリティ」の近代的な用例はまだ普及していなかった可能性があるのでは？

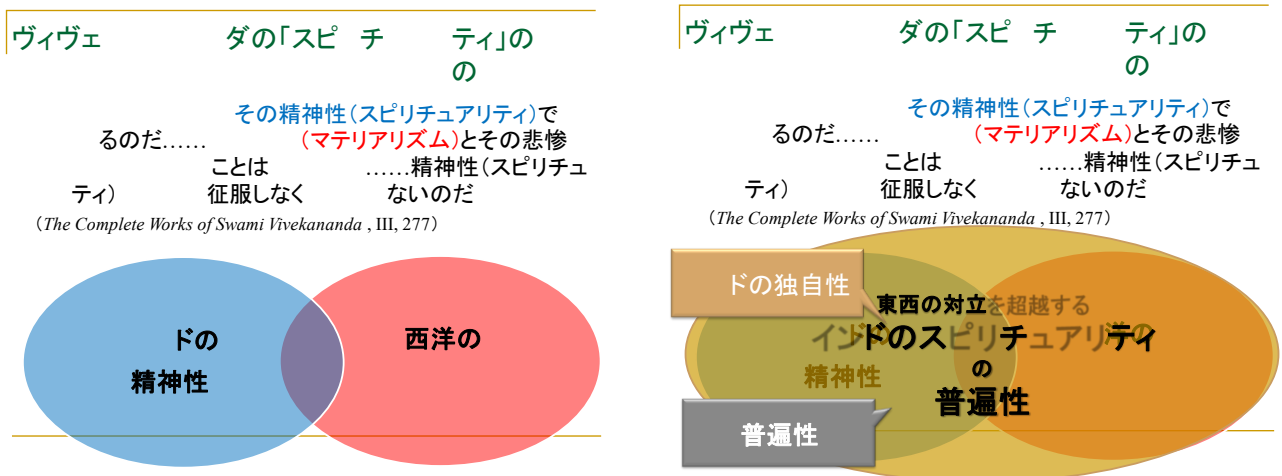
• ヴィヴェーカーナンダの「スピリチュアリティ」の語の利用は、西洋のオリエンタリズム的なその借用や反転ではなく、独自で新しいものであった可能性があるのでは？

• インドの宗教性について西洋の人々に伝え、また、イギリス支配下にあるインド人の国民的誇りを引き出そうとする中で、ヴィヴェーカーナンダ自身がこの語の新たな使い方に至った可能性があるのでは？

→ 「近代的宗教概念」は西洋近代の産物 (or それぞれバラバラ) の前提から抜け出る可能性

立ち上がれインドよ、その精神性(スピリチュアリティ)で世界を征するのだ.....物質主義(マテリアリズム)とその悲惨を物質主義で征することはできない。.....精神性(スピリチュアリティ)が西洋を征服しなくてはならないのだ。(The Complete Works of Swami Vivekananda, III, 277)

...オリエンタリズムの反転、肯定的利用か？ → 対抗ではなく、統合・止揚・普遍の志向ではないか？



...「分断」への挑戦の系譜として考える意義

●あらためて、「いまさらオリエンタリズム」？

- 「東洋」「近代」を考えることで、我々の思考と社会における分断の成り立ち、仕組を考え得るのでは？
- 同化か異化かの矛盾に向き合い、別のあり方を模索できるのでは？
- みなで共有できる言葉を探すために、既存のものを否定するのではなく、その中の共作性・共同性・重層性を見直す方法もあるのでは？